
矢印はいつ向かい合う

水溜り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

矢印はいつ向かい合う

【Nコード】

N3995Q

【作者名】

水溜り

【あらすじ】

『——知ってる。私は知っている。』センプαιの口癖の真似をしているうちに自分の癖になってしまったと文句を言う栄子。高校の、センプαιの最後の年に彼女は彼に言う。いつのまにか好きを通り越してしまった彼女の、最初の言葉。

学生恋愛もの。ボーイズラブ、ノーマルラブごっちゃ。

（前書き）

この話を読んでさいに起きた不都合に私は一切の責任は負いません！タグとあらすじをよく読んで人はどうぞゆっくりしてってください。

「すきです」

別にそんなに好きでもないけど、そういう恋した台詞を言うのはなんだかドキドキするの。

本当に恋したみたいなの錯角。空気がガラスの砂並みにキラキラして、吸い込むと死んじゃいそうなくらい胸が痛いんでしょ？

目を少し細めて、ゆっくりゆっくり蜘蛛が餌を引っ掛けるように笑いかけると、うつすら埃が積もりがちな写真部の部屋で、落書きだらけの木製のイスに座っていたセンパイは無表情のまま読んでいた物語から私を見上げた。

知ってる。私は知っている。

センパイは無表情で何考えてるかわかんないような顔して、実は今頭の中で会議中。ちびっこセンパイが何人もいて、「あーだ！」「こーだ！」「そーだ！」って意見を言い合ってる。

私が高くてこんなこと言うんだとか。髪の毛が長いなあとか。どうしようこのまま黙っておくのはヤバイ、とか。

それでも瞳はゆるがない。人形にはめるガラス玉みたいにぴくりとも。

瞬きが規則正しく繰り返される。

長くてピンとした睫が私の左斜め上の換気扇から降ってくる太陽の光で虹色に光っている。

いつの間にか、私は笑みを引っ込めて、センパイを深く見つめていた。

「本気？」

「本気じゃないように見えますか」

「…いや」

でも、と続けようとするセンプアイの憎たらしい唇を、私の唇でふさいだ。

ガチツ。勢いがよすぎて、歯が当たった。

「ん！」

センプアイも口を押さえて少しもごもごしてる。

対するこちらにも涙目で、示しがつきそうにない。

けど、もう勢いしか、ないのもわかる。

「センプアイは私のことどう思ってるんですか？嫌いってわけじゃないんでしょ？」

「そりゃ嫌いじゃないよ。栄子ちゃんえいこは俺のかわいい後輩だし」

「なら、付き合ってください」

「どうしてそうなった」

「友達や後輩であつても、キスしたときにもっと嫌そうな顔するものですし。それに、私の顔は良いほうなことも含め、センプアイの好みは黒髪ロングの清楚系。私にぴったりです」

「違うよ。俺はけっこうボブカットも愛してるし、栄子ちゃんは少し電波が入ってる」

「センプアイがボブカットが好きなら私は髪の毛切ります。とゆうか、人を電波キャラにするなんて失礼な人ですね。愛ゆえの行動です。仕方ないなって受け止めてください」

「仕方ないな」

「はい」

「はい、って…」

めったに笑わないセンパイがふふって思わずリスが漏らすため息みたいに笑う。

私の涙目はまだ続いていて、センパイが笑った途端に何かの衝動がところてんさながらに喉から目のくぼみへ押し出されていく。

「はくちゅっ！」

くしゃみだった。

口説く最中にくしゃみなんてすごかつこ悪い。

「大丈夫？」センパイは今度はすこし吹き出し気味に私に問いかける。

「これくらい大丈夫です。すいません」

「そっか、もしかして埃にやられたのかな」

「かもしれません。今度大掃除しなくちゃ」

「そうだね、最近みんな来てないから、俺と栄子ちゃんタッグでやらなくてはいけないかもしれないね」

小さくてうす暗い小部屋に男女二人きり。先輩と後輩。

文字で書くとなんともいかがわしい響きなんですな。

今は寒い時期だから、裸にはなれないけれど。

「……それは、」

「ん？」

「二人きりなんて気まずくて掃除できませんからお先に失礼しますって、私に言われないようにここで付き合うつて言っておきますか？」

「…断ると俺は顧問と薄暗い部屋の中で二人っきりかあ」

「断ることを考えるなんて人でなしですね」

「ごめん」

あからさまに傷つきましたと表情を作れば、すぐに謝ってくる。
センプイは簡単に笑顔を作って、私に「俺は栄子ちゃんのことなんでも知ってる」と言う。

知ってる。私はセンプイが私のことをお見通しなことくらい。
それくらい私が好きなことくらい。

だから告白したの。

私は甘やかされたいし、恋をしてみたい年頃だから。

センプイの考えてることわかるよ。

私を自分のものにしてみたいんだよね。

あげるから。

センプイは早く私に「すきです」って言うて。

さつきから心臓がきりきり痛むの。

体温調節があまり得意じゃなくなったの。

「俺は知ってる」

何を。

「栄子ちゃんは嘘つきで、理屈屋で、ちょっと変なこと」

「喧嘩売ってますか？」

「最後まで聞いて。」

ぬう、私は欠点を並べられるのは嫌いです。

センプイは私を深く見つめる。

皮膚を破いて、筋肉を裂いて、髄を舐めるように。

センプイの息が近い。

いつのまにこんなに近づいたんだろう。

「君は知ってる」

何を。

「そんな君を、俺が好きだって言うこと、と」

、と？

「そんな俺が、さっき先輩とヤツてたこと」

薄っぺらい、実に薄っぺらい笑顔。

センパイは笑い、私の髪に触る。

そして「栄子ちゃんは切らないほうがかわいいよ」って言う。

体が、凍りそう。

酢酸臭くて、黒いカーテンが窓に張ってある小さな部屋。

荒い呼吸と二つの裸体。

私ができないようなエロいキスをして、私ができないような、センパイを気持ちよくさせることをたやすくやってしまう私の三個上の先輩。

センパイが高校一年のときに三年だった人で、私はそのときまで名前と噂しか知らなかったけど、センパイが漏らした「好き」ですべてわかってしまった。

私は知っている。

薄い扉の向こうで、センパイたちが何をしてたのか。

センパイは私を知っている。

センパイをもし食べたとしても先輩の味しがないように。
私を食べてもセンパイの味しがないこと。

「ごめんね、栄子ちゃん」

これは、べつに恋ではないの。だからこの涙はフェイクです。
失恋とかぜんぜんしてません。

憧れとか、尊敬とか、好みの問題で私はセンパイを気に入っていて、
それが先輩に盗られた気分になって惨めになってるだけです。
だけど、でも。でも。

「私はセンパイを幸せにします。好きにさせて見せます。私、けっ
こう料理とか得意です。将来の夢はお嫁さんです。でもセンパイが
言うなら、何だってなれます。宇宙飛行士とか！今から猛勉強しま
す。わたしっ」

「うん」

「本気なんです。本気なんですってばあ！」

「うん」

「笑わないで、聞いてくださいっ…」

「、うん」

「わたしじゃだめですか？先輩に勝てませんか、？」

「ごめんね、ごめん。大切な人なんだ。」

傍に居たいんだ。

絞りだした声が、耳元から聞こえます。

センプイが、泣いています。
私をあやすように抱きしめて、謝っています。

知ってます。私は知っています。
センプイだって知ってます。

「私、浮気なんかしませんよ！毎日いつてらっしゃいのキスしたり、ご飯おいしいねって夕ご飯一緒に食べたり、センプイが浮気を疑ったりしたら体の隅々まで調べていいし、子供も生めるし、結婚だって、できるし！」

「うん、そうだね。そうなれたら、明るくて楽しそうな家庭になるだろうね」

「この、人でなし！おバカ！センプイは人の気持ちをよく考えてください！」

「ほんとごめん」

「謝るんだったら！幸せになつて、くださいよお！なんで心配させるんですか。センプイが泣いてばかりいるから、私は仕方なくっ」

「うん」

「あんな、最低な男のどこがいいんですか。あのヤリチン！浮気男！いっぱい持つてるなら、センプイの一人や二人くれてもいいじゃないですか！ねえ！」

「仕方ないよ」

「なにが…」

「好きになっちゃったらもう、仕方ないんだ」

泣いている、センプイが。

涙の雫をひとつひとつ丁寧に生産して、シャツの上に落としていく。綺麗だったから、思わずセンプイの頬を舐めていた。

「ん！」

早く気付いて、先輩。

「栄子ちゃ、なにすっ」

「いえ…、おいしそうだったので」

「だったので、って…」

早く大切なものに気付かないと、盗って行きますよ。

卑怯でも、なんでも手段はいと思います。

それとも、センパイのことは遊びでしょうか。

なら、私にください。

全身全霊で愛しますから。

女には孕むとゆう最終手段があることを、どうかお忘れなく。

（後書き）

浮気者の先輩が純粋にセンパイを愛してたらセンパイとしてはハッピーエンドだけど、そうじゃなかったら栄子ちゃんエンドです。

センパイは栄子ちゃんエンドでも幸せになれる。けど、先輩がセンパイを純粋に好きで、それを伝える前に栄子ちゃんが子供作ったらセンパイは責任を取るだろうから、先輩だけ可哀相なバッドエンド。センパイはそのときだけ悲しいけど、栄子ちゃんとの子供がすごく愛しくなっって幸せエンド。

栄子ちゃんはセンパイが一緒なら幸せエンド。

裏ルートで、栄子ちゃんがセンパイとの子供作って結婚して幸せエンドになった後、先輩が栄子ちゃんと子供を殺してセンパイの目の前で自分も死ぬエンド。全員バッドエンド。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3995q/>

矢印はいつ向かい合う

2011年1月28日12時53分発行